

## 文学教材の〈語り〉の分析について

松 本 修\*

(平成9年4月30日受理)

### 要 旨

文学教材の教材研究における〈語り〉の重要性が増している。しかし、従来のナラトロジー導入には、〈語り〉が新しい一つの解釈装置として用いられているという欠点がみられる。ここでは、互いの読みの交流をはかるための共通認識を形成するという〈語り〉分析の意義を確認しつつ、教材研究における〈語り〉分析の簡略な方法の提案を行う。この方法は、次の三つの点の検討を骨子とする。

- ①「語り手」は物語の局内にいるか。
- ②「語り手」は人格性を持つか。
- ③「語り手」は誰に寄り添っているか。

具体的な教材として「ごんぎつね」をとりあげ、〈語り〉分析によって、個々の読みの交流を図るための共通基盤を持つことが可能になることを例証する。

### KEY WORDS

語り narrative

ナラトロジー narratology

語り手 narrator

読みの交流 the exchange of interpretations

### プ ロ ロ ー グ

文学作品の読みにおいて、〈語り〉を把握することの重要性が指摘されている<sup>(1)</sup>。しかし、これらの指摘は、新たな解釈装置としての〈語り〉の優位性を主張することが多く、結果として自らの解釈の正当性の根拠として〈語り〉概念が利用されている観がある。だが、同一の作品についての全く異なる解釈の根拠として同じ〈語り〉概念が使われている例がみられる通り<sup>(2)</sup>、〈語り〉がただ一つの解釈の正当性を優先的に保証することなどありえない。むしろ、〈語り〉の分析を踏まえて、どこまでが解釈の共通の基盤であり、どこからが読者それぞれの自由に委ねられるものなのかの見取り図をあらかじめ得ることができるのだと考えるべきであろう。国語科教育における教材研究においてもこうした〈語り〉概念の導入が図られているが、同じような誤解が見受けられる<sup>(3)</sup>。ここでは、教材研究に必要な範囲で、〈語り〉の分析の要素と枠組みを検討するとともに、実際の教材「ごんぎつね」に即して、個々の読みの交流を図るための前提となるという、その分析の意義を確認しておきたい。

---

\* 学校教育学部附属実技教育研究指導センター

## 1. 〈語り〉分析の導入にみる〈語り〉の要素

教材研究にかかわる〈語り〉分析に直接・間接に影響を与えているのは、ジェラルド・ジュネット、フランツ・シュタンツェル、あるいはシーモア・チャットマンなどの著作であり、一部には、言語学領域における話法研究とりわけ自由間接話法研究の影響もみられる。この領域では、様々な用語が用いられ、統一がとれていないのが実態であり、教材研究にかかわって言及されている〈語り〉の要素が、それぞれどのような理論を背景にしたものか十分には言及されていないのが実態である。また、ある理論における〈語り〉の要素を用いる場合にも、その有効性の範囲が特定されているわけではないし、教材研究にかかわる〈語り〉の要素として注目されているのはナラトロジーの体系の一部分というのが現実である。〈語り〉はあくまで個々の文学作品に見出だされるものであり、〈語り〉の要素の概念としての有効性は、テキストに即した形でしか議論できないという事情もある。そこでここでは、教材研究にかかわって提出されている田中・三谷・山本の三つの論<sup>(4)</sup>において議論されている要素を取り出し、その要素について検討するためにどのような枠組みを用意し、どのような手続きをとればよいのかを考え、次いで〈語り〉分析の国語科教育上の意義と留意点について考察する。

田中は、「羅生門」の読者が下人の考えを語り手の考えとして読むことを批判し、語り手が下人という主人公を批評するものとしてのこの小説の構造的・ことばの仕組みを理解しなければならぬことを繰り返し強調している。これは「羅生門」のメタフィクションとしての性格に注目した読みであり、こうしたことは、従来も語り手による「作者」の自称、Sentimentalismeというフランス語の使用などによって着目されてきた。また、老婆の弁明を語り手が要約してしまうことにも着目がなされてきた。このことは、「羅生門」の語り手が、作者として読者に真向きになる語りの場がかなりはっきりとした場として機能し、そこにおいて読者は語り手の声を聞くと同時に、その語りを通して、下人の考えや行動を、物語の進行の舞台を覗き込むように見聞きする、ということの意味する。田中は、この二つの場の違いを強く意識し、語り手が下人に対して距離を置いていることに、語り手の下人に対する批評を読み取ったのである。ここで注目されている要素は、作者・語り手・登場人物の関係をあらわす人称の問題、語りの場の独自性を表す表現上の問題（これは、「作者」と自称することなど、語り手が自らの位置を示す人格性の問題である）、語り手が登場人物の言葉や考えを表す話法の問題の三つである。

三谷は、まず文末表現に着目し、「「た」は筋書きを支える有意味的な〈話素〉を、「る」は無意味的な〈描写〉を意味している。」「「ない」という打消の文末は、既に述べたようにこのテキストの特性の一つである。読者の期待や想像を喚起・拡大しながら、それを否定・不在化する、この見せ消<sup>け</sup>ち的技法は、〈描写〉に属している。」<sup>(5)</sup>と述べているように、話素と描写という叙述のレベルの差を問題にしている<sup>(6)</sup>。また、時間構成の問題を取り上げ、その順序の混乱を指摘しており、同時に時刻制度の二重性の問題をやはり取り上げている<sup>(7)</sup>。そして、語り手と下人との距離を見ると同時に、その二つの声の重なりを、主として自由間接言説を用いた一人称的視点という概念によって析出している。三谷の用いている用語は、会話文、内話文、自由間接言説、草子地というものであるが、これは田中も問題にしていた作者・語り手・登場人物の関係を検討するための概念である。これによって、語り手の考えと登場人物の考えとの距離をはかりながら様々なレベルの叙述を整理することが可能となっている<sup>(8)</sup>。

山本は、「ごんぎつね」をめぐる、従来の視点論に基づく解釈の不備を指摘しつつ、「ごんぎつね」においてしばしば問題とされている「兵十はかけよってきました」という一文の解釈を助ける概念として、シュタンツェルの「物語状況」の概念を導入している。そして「語り手」と「映し手」（作中人物）とを両極とする物語状況の動態化ということを指摘し、問題の一文における物語状況の変化を指摘して解釈の混乱を解決した<sup>(9)</sup>。この論では、語り手と登場人物との距離の問題が、かなり整理されて提示されている。

教材研究において、生身の作者と語り手を区別することは常識化したとみてよいだろう。三つの論では、さらに語り手と登場人物の問題、とくに語りのさまざまなレベルの変化が問題になっており、それを区別する概念が必要とされていることがわかる。ただし、こうした観点は従来の一般的な教材研究には導入されていなかったため、何を問題にしているのか理解されにくいという側面もある。〈語り〉という概念そのものの理解と、〈語り〉分析の手続きの理解のための枠組みの提示が要請される所以である。

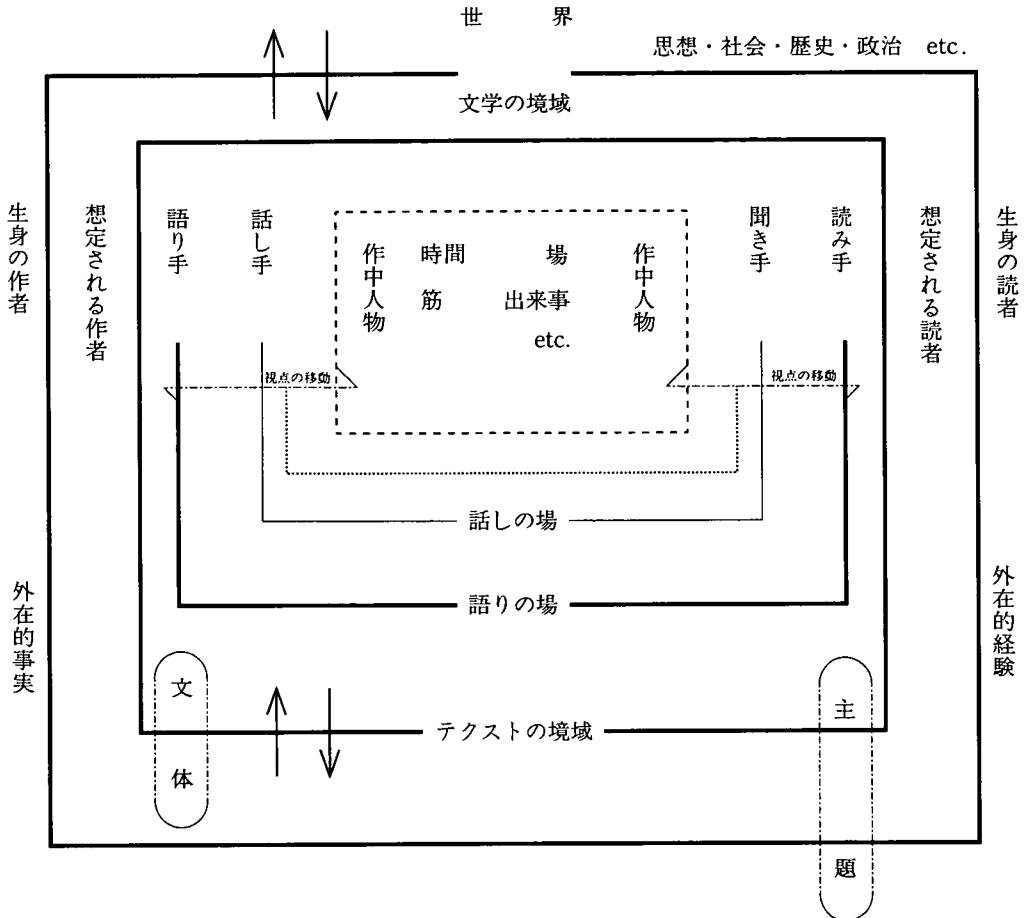
たとえばミーケ・バルによるナラトロジーの概説書<sup>(10)</sup>において、語り手の位置にかかわって検討の項目となっているのは、文の主語と語り手との関係、筋にかかわる語りと単なる説明あるいは様々なタイプの描写の区別、語りの諸レベルの区別であり、検討した三つの論において問題とされていることがら、従来の教材研究に欠けていた、ナラトロジーの重要な部分にあたることがわかる。このあたりの枠組みを示し、三谷・山本の論で用いられている用語の内容にかかわって、語りの諸レベルを区別するといった分析のための手続きを示したい。

## 2. 〈語り〉の分析の枠組み

以上の検討の内容に即して作成したのが、次ページの物語の外縁構造図である。作者、作品、テキストという文学をめぐる把握のありかたを含ませることで、〈語り〉あるいは〈語り手〉概念をとらえやすくなるよう配慮した。また、従来よく問題にされていた「視点」や「主題」といった概念を位置付け、従来の解釈との関連もとらえられるように配慮した。〈読者〉の問題は、検討した三つの論では重視されていないが、〈語り〉分析の手続きおよびその意義を論ずるために必要であることと、作者・語り手に対応する概念として対称的に位置付けておくことで、読みの多様性を説明しやすくするために補った。以下、この物語の外縁構造図に即して説明を加える。

文学作品は、「世界」の中であって、「世界」への人間のかかわり方の一つとして存在する。そのかかわり方は文学という呼称の独立性に対応する形で一つの境域を形成する。ただし、その境界は固定的なものではなく、自在に世界と交通する。この「文学の境域」は、文学性という概念的な価値に支えられるものであり、生身の人間としての個々の作者や読者はそのすぐ外側に位置する。一方文学の境域の内側にあるのは、テキストのことばから想定される作者であり読者ということになり、生身の作者・読者とは異なる。この作者は「紙でできた作者」（バルト）や「内包された作者」（ブース）などの概念に重なる。読者はテキストのことばの向こうにこの作者を想定することになるため、「想定される作者」とした。一方、生身の読者もまた、テキストの要請によって、どこか実在の自分を離れた存在としての読者を形成する。これを、想定される作者に対応する形で「想定される読者」として位置付ける。たとえば「ごんぎつね」というテキストにおいて「想定される作者」はその幼児期に茂平というお爺さんから「ごんぎ

図 物語の外縁構造



- ・ 語り手 < 局外 < 人格化  
                   局内           非人格化
- ・ 視点 語り手は誰に寄り添っているか
- ・ 作者 = 語り手 = 話し手 = 作中人物  
           ≠           ≠           ≠

つね」の話を聞いた大人なのであり、その「想定される読者」は、「想定される作者」がこの話を昔聞いたのと同じくらいの子供であろう。大人が読んでいても、その読み方は、子供のそれとして想定される。なお、従来「作品」として把握されたのは、文学の研究対象として「想定される作者」と「生身の作者」とが、いわば伝記上の作者として重ねられていた状況の中で、作者に強力で結び付けられた形で把握されていたテキストのことであり、そのため、この図には位置付けていない。また、テキストは固定的な境界を持つものではなく、あくまで読者による読みの活動によって与えられるものであり、いわば伸び縮みするものである。たとえば、カフカの「掟の門前」を単独のテキストとするか、「審判」の一部分をなすテキストとするかは、読者に委ねられている。テキストのことはを統括し、テキストの読み手にことばを届けるのは、「語り手」である。ただし、この語り手は、物語世界の中にまで自在に出入りする存在

であり、その視点を常に移動する存在である。「話し手」が区別してあるのは、物語全体を統括する「語り手」と内部の「語り手」が別な場合を分けるためと、かぎ括弧による台詞には明確な「話し手」が存在するためである。たとえば、「ごんぎつね」の「語り手」は「私」であり、茂平というおじいさんから聞いた話をそのまま語るという構造になっている。この場合、ごんにまつわる話の「話し手」は茂平であるとも見なせるわけである。草稿では、「むかし、」以下の物語の前に切断があり、この構造がよりはっきりしている。こうした場合、「語り手」と「話し手」は区別する必要がある。また、「羅生門」では、下人や老婆という作中人物の台詞があり、彼等が「話し手」となることもあるが、やはりかぎ括弧に囲まれた老婆の弁明は「語り手」による要約なのであり、このかぎ括弧を台詞とみなすならばその「話し手」は「語り手」だということになる。ちなみに「羅生門」の場合、「語り手」は「作者」を自称するが、この「作者」は、「想定される作者」のことではない。この「作者」は「語り手」の人格化を果たし、「語り手」像を鮮明にするにすぎない。「想定される作者」は、あくまでそのような「作者」を自称する「語り手」の語るテキストから読み取れる、このようなテキストを生み出したと考えられる作者のことである。一方、「語り手」に対応するものとして「読み手」を想定するのは、物語というものの性質上、「語り手」の統括する語りを読むものとしてその相手が想定されるからである。たとえば森鷗外の「舞姫」においては、物語を統括する「語り手」はサイゴンの港に停泊中の船の中で手記を書く「太田豊太郎」であり、「読み手」はその手記を読む者であろう。ただしその読み手の読みの場は特定されていないため、書かれつつある手記を覗き込むような感じになる。一般に「読み手」は「語り手」に寄り添い、その忠実な読者となるのが基本的な形であり、「語り手」の視点の移動は、「読み手」の移動を連動してもたらず。図では、点線でそれを示している。たとえば、「語り手」がある「作中人物」に近付けば、「読み手」もまたその「作中人物」に近づく。もちろん、実際の読みにおいて、テキスト世界を再現するばかりではなく、「これはつまらぬ小説だ」などと考える読者も存在しえようが、それは、生身の読者が介入したと見るべきであろう。「聞き手」は台詞の「聞き手」であり、「羅生門」なら老婆の台詞の「聞き手」は「下人」である。そして「語り手」による要約された老婆の弁明を聞くのは、「読み手」である。このように幾重にも囲い込まれたところに物語の筋があり、出来事がある。ただしこの出来事の時間的・空間的配置もまた「語り手」によって決定され、筋のつながりもまた同じである。こうした配置、つながりを把握する上で重要なのが、作中人物・時間・場といった要素であり、これはまた「語り手」の〈語り〉の方法にかかわる。〈語り〉の分析は、ここに示したような枠組みに沿って、テキストに即して、必要な要素（たとえば、「話法」など）に基づく検討を行っていく手続きをとることになる。

### 3. 〈語り〉の分析の観点と手続き（「ごんぎつね」を例に）

#### 3. 1. 〈語り〉の分析の観点

前節で述べたような枠組みにおいてテキストの〈語り〉を把握する際に、その〈語り〉を分析していくポイントが認められる。それは2節で見た三論にも特徴的に見られたものであり、「語り手」が物語世界に対してどのような位置関係をとっているか、ということである。この点を検討していくための具体的な項目として、前掲の物語の外縁構造図の下に三点をあげておいた。

まず、「語り手」が物語の局内にいるのか局外にいるのか、という点である。「語り手」が物語の作中人物でもある場合、たとえば「吾輩は猫である」などと自称して活動する場合が典型であり、実際このテキストは「吾輩」の死によって語りの終焉をむかえる。「舞姫」の「語り手」は局内におり、「羅生門」の「語り手」はすでに見たように様々な徴証によって物語世界の局外にいることが明確である。また、「語り手」が人格性を持つか、という点が問題である。「語り手」が自己言及的な語りを一切おこなわない場合は比較的透明な神の視点からの語りのような形が実現する<sup>(11)</sup>。逆に、「語り手」像に関する自己言及的な語りが多ければ多いほど、「語り手」像は明確になり、人格化が強まる。人格化が強まるということは、「語り手」による物語の統御がより強力になることを意味し、読者はその統御に追従せざるを得なくなる。いわば語りの場が明確になるのである。非人格化された「語り手」による語りにおいては、読者は「想定される読者」・「読み手」・「聞き手」の区別をさほど意識することなく、直接に物語世界を覗き込むような感じになるが、人格化された「語り手」による語りにおいては、読者は、「語り手」の統御にかかる語りのレベルの変化に従って、その視点を追隨的に移動させることになるう。

従って、ついで必要なのが次の二点の検討である。「語り手」は誰に寄り添っているのか、という点と、「想定される作者」・「語り手」・「話し手」・「作中人物」の距離、等質性・非等質性という点である。「語り手」による語りのレベルが変化するとき、その時々で「語り手」は「語り手」自身なのか、あるいはいずれかの「作中人物」に寄り添っているのか、ということによって、読者もまた「読み手」として独立するか、いずれかの「作中人物」の寄り添った視点を獲得するのか、ということが決定されるからである。念のために付け加えておくが、ここでの読者は観念上の読者であることは免れない。現実の生身の読者はこれ以外の要因によって変化しうる。たとえば、ある作中人物を気に入らないと感じた場合、「語り手」の寄り添いにもかかわらず、その作中人物に寄り添わず、あくまで読み手としての位置にとどまる、といった可能性はある。テキストの本文は動かないが、生身の読者は実際の読書の時空にあるため、いかようにも介入できる。

こうした点の検討のために用いられていた概念が、「人称」「話法」「時間」「物語状況」などといったものであった。私自身も、「ダイクシス」分析という方法をすでに提案している<sup>(12)</sup>。実際に必要な概念を呼び出しつつ「ごんぎつね」の〈語り〉の分析を行ってみたい。

### 3. 2. 「ごんぎつね」の分析

#### 3. 2. 1. 「語り手」は物語の局内にいるか

「ごんぎつね」の「語り手」は、「私」を自称する。また、物語冒頭で「これは、私が小さいときに、村の茂平というおぢいさんからきいたお話です。」<sup>(13)</sup>とあって、「私」は物語の局外にいることが明確である。第二文の「むかしは、私たちの村のちかくの……」という叙述における「私」はすでに指摘したように「茂平」である可能性もある。ただし、本文は「です」「ます」調の標準語調であり、村のおじいさんの口調とは異なっている。しかし物語そのものは茂平の話した話そのものであるという前提があるのであり、「私」による文体の変調はあるものの、物語の中身そのものは茂平の語りに重なりうる、と考えるべきであろう。これも指摘したように「草稿」では前文に続いて、「一」として「むかし、徳川様が世をお治めになってゐられた頃に……」という語り出しがあり、やはり「です」「ます」調であるものの、おじいさん（草稿では「茂助」）の語りがそのまま示されるという形になっている。「ごんぎつね」には、物語を統括

する「語り手」(「私」)がおり、それが「茂平」という「話し手」の話す物語を口伝えに語るのわけである。そして、この「語り手」に対応する読者が「読み手」であり、茂平の話の直接の聞き手は「私」であったわけである。従って、「ごんぎつね」の物語世界は、茂平という「話し手」の話を「聞き手」であった「私」が仲介し、全体の「語り手」として語りを統御しつつ「読み手」に示すという枠組みを持っていることになる。

### 3. 2. 2. 「語り手」は人格性を持つか

「ごんぎつね」の「語り手」は、昔聞いた話を話して聞かせるという昔語り風の語りの場に位置していて、その点では人格性を持っている。しかし、「ごん」の物語が始まると、全体を統御する「語り手」の存在はむしろ薄らぎ、超越的な視点からの語りと同様となる。つまり、「ごん」以下の作中人物を名前で呼ぶ、透明な非人格的な「語り手」となる。山本も指摘していたように、このテキストでは、「或秋のことでした」という「ごんの物語」の始まりから、「ごん」という作中人物(山本論では「映し手」としての)に寄り添う、非人格的な語り手によって物語は進行するのである。ただし、すでに見たように、この「語り手」には、「茂平」というもう一人の「語り手」(「私」が話を聞いた時点での「話し手」)が隠れており、この物語の「語り手」としての茂平は、兵十のことではないか? という疑いを読者に抱かせる可能性がある。このことを指摘したのは北吉郎である<sup>(14)</sup>が、そうだとすると、このテキストでは、「想定される作者(新美南吉と名指される作者)」と「語り手」は時代背景、物語世界の地理からみて、かなり近い存在として想定されており、もう一人の「語り手」である茂平は、実は自らを「作中人物」兵十として独立させ、自らがかつて理解しえなかった「ごん」の側に立った昔語りとしてこの物語を語っているのだということになる。草稿では、狐への呼称は末尾部分を除いて「権狐」であり、愛称的な「ごん」よりも距離が広がっており、末尾部分で「ごん」という形に呼び名が変更されることの意味を重くとれば、北の解釈を支持する要素となろう。また、物語世界の「時間」は、茂平の若い頃にほぼ一致し、この解釈に合致する。この読みに立つ場合は、非人格的な「語り手」として語られてきた「ごん」の物語が、その末尾に至って一挙に兵十＝茂平の物語として転回することになり、物語世界は急転して茂平という人格化された「語り手」による再構成を読者に迫ることになる。しかし、こうした読みに立つか否かにかかわらず、「ごん」の物語そのものを読む段階においては「語り手」像は非人格的なものと見てよいと思われる。

### 3. 2. 3. 「語り手」は誰に寄り添っているか

「ごんぎつね」の「語り手」は、物語の局外の語り手ではあるが、物語世界の中では、自在に登場人物に寄り添う。次の引用はそれぞれ語りのレベルが異なっている。

- a 雨があがると、ごんは、ほつとして穴からはひ出ました。
- b ふと見ると、川の中に人がゐて、何かやつてゐます。
- c 「兵十だな。」とごんは思ひました。
- d ちよいと、いたづらがしたくなつたのです。
- e 加助は、ごんには気がつかないで、そのまゝさつさとあるきました。
- f おれが栗や松たけを持っていってやるのに、そのおれにはお礼をいはないで、神さまにお礼をいふんぢゃおれは、引き合はないなあ。
- g こなひだうなぎをぬすみやがつたあのごん狐めが、またいたづらをしに来たな。

h 兵十はかけよつて来ました。

a は、「ごんは」という呼称、「はひ出ました。」という表現から、「語り手」が超越的な立場から描写している部分とみられる<sup>(15)</sup>。b は、主語の省略により、より「ごん」に「語り手」が寄り添っており、ほぼ「ごん」の視点から描写を行っているものと考えられる。c は、「ごん」の心中思惟（三谷の用語で言えば心内語）を、「語り手」が「読み手」に伝えているものである。「語り手」が「ごん」の心を知っているのは、超越的な立場にあるからである。d は、「語り手」による「読み手」への説明である。こうしたところに「語りの場」が機能する。e は、加助の行動を、その理由を含めて「語り手」が「読み手」に説明している部分である。この箇所について「語り手」が加助の心の中に入ったとする望月の見解があるが、少なくとも加助の視点に立っているとは言えず、「語り手」は加助の認知をも知っている超越的な存在だとして、その説明ととらえるべきであろう<sup>(16)</sup>。f は、「ごん」の心中思惟が地の文にそのまま現れているもので、自由直接話法と判断される。ここでは「語り手」が「ごん」に同化したような形になり、同時に読者も「ごん」に近付いて、同化しやすくなる。ただし、草稿では三か所の自由直接話法を除いて引用が明示されており、典型的な自由間接話法も見出せない。定稿でも典型的な自由話法は三ないし四か所である。g は、自由間接話法による「兵十」の心中思惟であり、「六」節における「語り手」が途中から兵十に寄り添っていることに呼応している。h は、「六」節において兵十に寄り添っていた「語り手」が「ごん」に近い視点から兵十を描写したものである。このような叙述を自由間接言説として認定し、「ごん」の声をも表しているとする向きもあるが、固定的に把握できるものではない。この部分は従来の人称視点論によっても把握しきれないし、話法概念によっても把握しきれない。「語り手」が「ごん」に寄り添ったことは確かであるが、その度合いや、そのことをどう解釈するかは、「読み手」の位置の取り方にかかっており、いわば読者にまかされているといつてよいだろう<sup>(17)</sup>。

以上のような分析によって、「ごんぎつね」の〈語り〉はほぼ把握されよう。この具体的な手続きにおいて、用いられた概念は、主語・主格として現れる人称法、物語の時間、語りの場・物語の場といった、ダイクシスにかかわる概念と、心中思惟、自由間接話法（言説）といった、話法にかかわる概念である。視点概念もかわるが、従来の視点論の枠組みを外して、「語り手」の寄り添いを説明する補助的な概念として有効である。

#### 4. 〈語り〉の分析における共通性と個性

ここまでの検討で一部触れたように、〈語り〉の分析においては、読者間に共通の認識として共有される部分と、そうではない部分とがある。前節の f の表現について見れば、これが「語り手」のことばと見ることは共通の認識となりえようが、「語り手」が「ごん」に近い位置に視点をおいて描写をしているのか、「語り手」と「ごん」の声が自由間接言説によって二重に響いているのかの区別は、個別の読者の裁量に委ねられるだろう<sup>(18)</sup>。さらに、後者の立場をとる場合、「語り手」の声をより強く聞き取るか、「ごん」の声を強く聞き取るかは、個々の読者の裁量に委ねられる。「来ました」という表現に、「語り手」の声がより強く感じられるとは言え、この部分で「ごん」に感情移入し、「ごん」の声をもっぱら聞き取ろうとする読者もありえる。これも既に触れたが、茂平は兵十ではないかとする解釈も「語り手」と「作中人物」概念にかかわるが、物語の全体を包む枠組みにおける具体的な把握が、このような疑いを持たない解釈



と大きく異なることになる。こうした場合も、茂平は兵十だ、とする読みの正当性に関する絶対的な判断は有り得ず、判断は個々の読者にまかされているのだと考えるべきであろう。

要するに、〈語り〉の分析にあっては、その分析の枠組み、概念には共通性が認められるものの、その〈分析〉の結果がもたらす解釈においては個別性が認められるということになる。それは、〈語り〉の分析の観点が多岐にわたっており、一か所の表現をめぐっても、どの観点を重くとりあげるかということによって解釈が分かれるからである。「兵十はかけよって来ました。」という一文において、この文脈での語り手の兵十への寄り添いの一貫性を重視したい読者も、「来る」ということを重視しつつ「ごん」への寄り添いを重視したい読者も、「ました」という語り手の超越性を重視したい読者も、現実には存在するのである。とすれば、〈語り〉の分析の持つ意義は、解釈の確定にあるのではなく、むしろ共通の枠組みによってそれぞれの解釈が比較できるという点にあるといえよう。「茂平は昔のことを後悔している。」というような感想の奥には、「私」に重なるもう一人の語り手として茂平を捉え、その茂平を内部徴証によって兵十に結び付ける〈語り〉の把握が（無意識にでも）あるかもしれない。「ごんは兵十にわかってもらえてうれしかったと思う。」というような感想の奥には、「兵十はかけよって来ました。」という一文において、「ごん」の声を強く聞き取る「読み手」がいるのかもしれないのである。教材研究において、〈語り〉の分析を行うとき、分析を進めつつ、個々の解釈が分かれていくその分岐点を、見定めておくことが重要である。個々の解釈がどのような読みから生まれてきたのか、その背景を〈語り〉の構造に求めることで、解釈の優劣だけではない、読みの在り方の比較が可能になるからである。それによって、解釈の正誤優劣を問題にする授業から、個々の読者の読みに出発して互いの読みの交流を図る授業への転換が行われるのである。しかし一方、それは、互いの解釈を無条件に許容しあい「衝突のない多様性」に任せるということでもない。むしろ、互いの読みの前提を問い、解釈を比較しつつ自らの読みの前提に学習者自身が気づき、読者としての自己を変革していくような読みの授業への転換が行われるべきだ。そこでは、「想定される読者」を固定的に把握して学習者におしつけ、画一的な解釈を強要することは許されない。「生身の読者」の侵入を許しつつ、〈語り〉のありようとの関係から解釈行為によって「生身の読者」の変容を促していくような、動的な読みを実現していくことが求められるのである。

## 注

- (1) 国語科教育における教材研究に直接影響を与えているものとしては、次の三氏の著作があげられる。

小森陽一 『構造としての語り』 新曜社 1988

——— 『出来事としての読むこと』 東京大学出版会 1996

田中実 『小説の力—新しい作品論のために—』 大修館 1996

三谷邦明 『近代小説の〈語り〉と〈言説〉』 有精堂 1996

このうち田中氏は、自らの研究を「教材価値論」と交差するものとして位置付け、中学校・高等学校の教科書教材を検討対象とし、教材研究の方法に通じるものとして、〈語り〉分析の重要性を示している。また、三谷氏は、前掲書中の「『羅生門』の言説分析—方法としての自由間接言説あるいは意味の重層性と悖徳者の行方—」という論文（pp.199-237.）

において、「羅生門」をとりあげた理由として「このテキストが、高等学校の安定教材となり、「国民」的にポピュラーであり、言説分析が、教材研究を含めた、厚い重さをもったこのテキストの研究史を、脱構築化できるかどうかという賭けを試みてみたかったからである。」(p.199.)と述べており、教材研究における〈語り〉分析の重要性に言及している。

また、三谷氏は、次の短い論文でやはり文学教育における言説分析の効用を説いている。

三谷邦明 「中島敦『山月記』の虚構構造－言説分析の視点から－」『日本文学』No.517.日本文学協会 1996.7. pp.68-70.

- (2) 田中実氏の前掲書中の論文「批評する語り手－芥川龍之介『羅生門』」(pp.22-54.)と三谷氏の論文「『羅生門』の言説分析－方法としての自由間接言説あるいは意味の重層性と悖徳者の行方－」は、いずれも「羅生門」の読みに〈語り〉の分析を行うことで、先行研究の不備を批判し、新たな読みを提出するという方法をとっている。しかし、その結論は驚くほど異なっている。

- (3) 国語教育の領域に〈語り〉分析の導入を図ったものとして次のものがあげられる。

山本茂喜 「「ごんぎつね」の視点と語り」『人文科教育研究』22 人文科教育学会 1995

—— 「「冬景色」における視点人物と語り手」－「冬景色論争」と西郷視点論－ 高森邦明先生退官記念論文集編集委員会 『国語教育研究の現代的視点』 東洋館 1994

松本修 「ロラン・バルトのナラトロジーにおける方法と姿勢」『宇大国語論究』創刊号 宇都宮大学国語教育学会 1989.7.

—— 「「城のある町にて」における〈時間〉－描写と「語り」－」『宇大国語論究』2 宇都宮大学国語教育学会 1990.6.

—— 「「檸檬」における〈時間〉という方法－「瀬山の話」から「檸檬」へ－」『宇大国語論究』3 宇都宮大学国語教育学会 1991.6.

—— 「「舞姫」における叙述の場」 『宇大国語論究』6 宇都宮大学国語教育学会 1994.8.

—— 「「青森挽歌」における場のダイクシス」『Groupe Bricolage 紀要』 No13 Groupe Bricolage 1995.12.

—— 「「永訣の朝」におけるダイクシス－「語りの構造」理解のために－」『新しい国語教育の基層－長尾高明先生華甲記念論集』 長尾高明先生華甲記念論集刊行会 1996 pp.17-31.

中村哲也 「国語教材研究への文体論的アプローチ－文学教材における〈自由間接話法〉の諸層－」 1996年第90回全国大学国語教育学会発表資料

このうち、山本、中村両氏の方角には、〈語り〉分析によって教材解釈をある程度確定できるという前提があると見られ、筆者とは見解を異にする。この点については、次の論文を参照されたい。

松本修 「「語りの構造」分析における〈時間〉概念に関する覚書き」『Groupe Bricolage 紀要』No14 Groupe Bricolage 1996.12.

—— 「国語科教材研究における「視点」概念の問題－「ごん狐」をめぐる－」『国語科教育』第44集 全国大学国語教育学会 1997.3.

- (4) 検討の対象としたのは、次の三つの論文である。

田中実 「批評する語り手－芥川龍之介『羅生門』」 前掲書

三谷邦明 「『羅生門』の言説分析－方法としての自由間接言説あるいは意味の重層性と悖徳者の行方－」 前掲書

山本茂喜 「「ごんぎつね」の視点と語り」 前掲論文

- (5) 三谷邦明 前掲, pp.199-200., p.201.
- (6) 三谷は、「源氏物語」を中心に、〈語り〉の問題を継続的に論じており、その後、近代小説にもこの方法を適用している。ただし、語り手の物語世界の筋への関与と読者への関与が、主として敬語や助動詞の担うアスペクトなどによってある程度分離できる古典語と、現代語では事情は大きくことなり、誰が見ても同様の分析ができるということにはならない。たとえば三谷は注(1)に掲げた「山月記」論で、「近代の言説では、主格の不在が、自由間接言説を生成する」(p.69)と述べ、「羅生門」論でも「主格・主語の省略・不在が、地の文と一人称的叙述の二つの声が聞こえる、自由間接言説を生み出しているのである」(p.210)と述べているが、ことはそう単純ではないだろう。
- (7) 「申の刻下がり」といった物語の舞台にあたる時代の時刻制度と「何分かの後」というような語りの場における時刻制度とである。なお、「申の刻下がり」という表現も、近世の時刻制度に近いという見方もあるようである。
- (8) ただし既に述べたように田中・三谷両氏の結論は驚くほど異なる。なぜこういう事態が起きたかについての検討は別稿に委ねるが、語り手像などを描く過程で、〈語り〉の分析によって得られる解釈自体に幅があるということだけは指摘できよう。ほぼ同じ点を指摘し、分析しても、読みは分かれてしまうのである。
- (9) ただし整合的な解釈として山本の解釈が優れているということは、相対的な問題にすぎない。先走って言えば、問題の一文をあくまでごんの心の中のことばとして聞き取る読者ととめることはできないのである。ただ、なぜそういう解釈の違いが現れるのかを説明することができるという点で、〈語り〉が重要なのである。
- (10) Mieke Bal, (translated by Christine van Boheemen), *Narratology : Introduction to the Theory of Narrative*, Toronto : University of Toronto Press. 1985.
- (11) ただし、日本語の場合、話し手ー聞き手という二者関係がコミュニケーションの基本形となっている観があり、いわゆる三人称視点の語りによっても、全く超越的な語り手を生み出すことは困難である。たとえば英語においても He という主語を持つ文にも He~という文を発する I が存在するわけであるが、日本語の場合にはさらに、「その人」を「彼」と呼ぶうる「私」とは何者かという問題がすぐにつきまとう。「松本氏」でもなく「修」でもなく「彼」とその人と呼ぶ存在には、すでに人格化が伴ってしまうのである。
- (12) 注(3)に関連論文が二つ提示してある。ナラトロジーの領域では言及は少ないが、バル (前掲書 p.138) は、「語り手」の人格性を問題にする中で、人称や時制とならんで、ダイクシス deixis を検討項目としてあげている。
- (13) 以下、「ごんぎつね」の本文は次に従う。ただし、ルビは除く。  
新美南吉 「ごん狐」『校定新美南吉全集』第三巻 大日本図書 1981  
なお、題名については、教科書教材として「ごんぎつね」の表記が一般化していることから、本文では「ごんぎつね」と表記した。  
「草稿」については、次に掲載されているスパルタ・ノートのコピーに従う。  
半田市教育委員会編 『新編新美南吉代表著作集』 半田市教育委員会 1994
- (14) 北吉郎 『新美南吉「ごん狐」研究』 教育出版センター 1991
- (15) この場合の「描写」は、すでに見た三谷の〈話素〉と〈描写〉という用語とは異なる。ある叙述が筋を支えるか否かは読者によって決定されるものであり、文末表現から単純に帰結できるものではない。また、この場合「語り手」は、物語世界をそこで見ているか

のように「読み手」に伝えるのであり、それを「描写」と呼んだ。この場合の対概念はむしろ「説明」になる。「語り手」が「それは入り口が狭かったからです」などと解説するような場面がこれにあたる。

- (16) 望月善次 「「ごん狐」の「視点」ー〈「視角」転換説〉を否定するー」『読書科学』147 日本読書学会 1994.4.

- (17) この点については、次の論を参照されたい。

松本修 「国語科教材研究における「視点」概念の問題ー「ごん狐」をめぐるー」『国語科教育』第44集 全国大学国語教育学会 1997.3.

- (18) 山本（前掲論文）は、「一つの文を映し手によるものか、語り手によるものかを決定するのは、読者にとってほとんど不可能なことだ」としつつ、問題の一文については「ごんをフィルターとする視点とは言えない。」としている（p.30）。この判断そのものは、解釈の一貫性というところから支持できるものであるが、「語り手」の寄り添いを重視するかどうかを決定できるものではない。

#### 主参考文献（注に掲げたものを除く）

- フランツ・シュタンツェル （前田彰一訳） 『物語の構造』 岩波書店 1989  
 ジェラルド・ジュネット （花輪光・和泉涼一訳） 『物語のディスクール』 書肆風の薔薇 1985  
 ジェラルド・ジュネット （和泉涼一・神郡悦子訳） 『物語の詩学』 書肆風の薔薇 1985

## On analysis of narrative of stories as teaching materials

Osamu MATSUMOTO\*

### ABSTRACT

In the study of stories as teaching materials, the analysis of narratives has been increasing in significance. There is a fault that they treat narrative as a new system of interpretation in introducing narratology.

In this paper I discuss the significance that the analysis of narratives makes as a basis for exchanging interpretations and I propose a three point method for examining the effectiveness of narratives, as follows : ① Is the narrator internal or external ? ② Is the narrator's identity indicated in the text ? ③ To whom is the narrator snuggled up ?

I also illustrate the significance of the narrative by applying the method to the short story *Gon-gitune* by Niimi Nankiti.

---

\* Center for Skills Training